



Title	札幌バンドとイギリス非国教徒
Author(s)	コマシン, ステファニー
Citation	基督教學, 49, 20-23
Issue Date	2014-10-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/62433
Type	article
File Information	02Komashin.pdf



[Instructions for use](#)

札幌バンドと イギリス非国教徒

ステファニー・コマシン

新渡戸稲造、内村鑑三、宮部金吾を含む札幌バンドと、イギリス非国教徒は、時代、位置、文化において確かに甚だしく遠く隔たっている。宗教改革の急進派であって、身分制を否定するレベラーズ、コミュニティアンのデイガーズは、イギリス政府と政治的意見において相違があったことで有名である。しかし、札幌バンドは何人かのメンバーが公務員にもなった。それ故に、「こんなにも違うグループをなぜ比べることができるのか」という問いを持つ読者がいるかもしれない。

非国教徒と札幌バンドは、政治的な混乱の時代に生じた。イギリス宗教改革を起こした政府にとって、非国教徒の出現は喜ばしいものではなかった。同じように、歴

史家のオシロは「札幌のキリスト教は、北海道を国家に合併する計画から生じた、望まれていなく、また恐らく計画外の副産物であったはずだ」と述べた。非国教徒と札幌バンドの間には多くの共通点があるが、ここでは三つの着目点を示す。

新渡戸らは、農業を学ぶために北海道へと渡った。宮部は、日本の植物学者の中で優れた一人になった。新渡戸と内村は農林省で働いたことを詳しく覚えていないが、農林省での時間は彼らの思想と価値観の形成要素となった。農業経済学に興味を持ち続けた新渡戸の関心は、後の研究の中に反映されていた。内村は文学的業績を追求しながらも、水産学の研究において科学的貢献をし続けていた。彼は、「我々は我が国の物質的資源を開発するようにされていたのである。我々はけっしてこの目的からはずれなかった」と説明していた。

彼らは大学時代に、美しい景観の野外で集まり、野苺を食べ、祈り、賛美歌を歌っていた。そこでの自然が彼らの宗教的な思想を形成した。内村は、「宗教的不一致の芽ばえがすであつた、それが春風の中の桜狩りに

よって消散せしめられたのである。教会の難問題解決の最良法と思う」と述べた。札幌バンドの何人かのメンバーは、イエスの種を蒔く人のたとえ話に言及していた。別の例として、宮部のW・S・クラークへの手紙は「永遠の光の種を蒔き、植えつけた。実際に、ここで蒔かれた種は『良い地に落ちた』かのように、私たち残された信者に何倍もの実を結んでいます。私たちの主の念入りかつ継続的な水やりと情け深い恵みによって、私たちの遠く育った者にも種を植えられた」と自然にふれながら感謝を表現している。新渡戸の宗教的な思想は、このたとえ話と農業経済学の背景を統合して作られた。彼は「田畑は色づいて刈り入れを待っている。しかし、蒸気刈取機で刈れば一番うまくゆく田畑もあれば、大鎌の方がよいのもあり、また手鎌がぴったりの田畑もある。賢い農業家はそれぞれの田畑の大小、地質、形状を研究して、それぞれにふさわしい道具を選ぶ。賢い選択をするためには、気候や市場の研究さえ必要である。」と述べた。

デイガーズは、文字通りに土地を共有するという観念に基づいた農業共産主義を信じていた。その共有地とい

う土地は、政府から与えられた権利によってイギリス人全員に属するものであった。デイガーズは共有地について、「清く汚れない信心は、平穏な畑となる土地を皆に持たせ、彼らはその土地で労働により自由に生きるだろう」と述べた。農業は、彼らの宗教的な思想と深く結びついていて、札幌バンドと非国教徒の思想は、自然と農業の経験内部において霊的なものと世俗的なものとの区別がなかった。

「イエスを信する者の誓約」に署名した後、新渡戸らは学生寮で教会の集まりを始めた。奇妙にも、キリスト教に改宗した一期生たちは、新渡戸らの修養に関わっていなかったようで、そのために新しい改宗者たちは、どのようにして、いつ集まるか、また何を信じるかをほとんど自分たちで決めていた。この高い自主性は、農業科学者である新しい教会員に、自身の労働の神学を形成発展させた。彼らは、「イエスは大工の子で人類の救世主であり、我々は彼の謙虚な弟子で農夫、漁夫、技術者、製造者でありながら平和の福音の伝道者たることを許された。(中略)……我々が科学カレッジを卒業したとき

には、他の学校を出たどんな若者よりも浄められていた、と信じている」と説き、聖書における自立伝道者と自分たちを積極的に結びつけ、これをキリスト教の活動の自然な方法だと見なした。

札幌バンドのメンバーの何人かは卒業後、自立伝道者として実際に生きた。彼らは政府で勤めている間、他の労働者をキリスト教へと導いた。彼らは聖書中にある自立伝道者（信徒の献金によらず、自らの収入で生計を立てながら伝道する者）の記述を読み、現実の中で模倣していた。新渡戸、内村、宮部の三人は自立伝道者ではあったが、彼らの経歴は質素な農夫や漁師として生きるという主張と矛盾していた。著名で、高学歴で、さらには学者として雇われたという現実が、ガリラヤの漁師の慎ましい生活とはかけ離れていた。

同じように、レベラーズは、福音書に書いてある弟子たちのように、学者などでなく庶民と自称していた。しかし、実際には、その時代の水準からすると、教育レベルは高かった。レベラーズは貧乏人や賃金労働者の加入を許さなかったが、彼らは自分たちを聖書の貧しい自立

伝道者のように見なしていた。

デイガーズは、「聖書は羊飼いの、牧夫、漁師などの、低い地位の素人の人々によるものだ……」と指摘して、自分たちの農業の生活が聖書の記述に合っていると明確に考えていた。彼らの何人かは下層階級に属し、イエスの弟子たちの牧歌的なイメージと一致していた。一方で、意図的に快適な家を諦めることで、下層階級の人々と同じような生活をしていた者もいた。このように、現実が理想と異なっていたが、札幌バンドと非国教徒の両者は自立伝道者の理想を共有していた。

札幌バンドは初め、金銭的な援助を受けたため問題に直面していた。金銭的援助を提供した二つの教派との問題は、彼らの生来の感覚に影を投げかけた。内村は、「我々は我々の基督信徒の経験においてはじめて教派主義の弊害を感じた」と述べた。彼らがお金を貯めて米国メソジスト監督教会にローンを返し、独立を回復するのに二年かかった。この経験は、「依存の人はこの宇宙にあつていちばん無力な存在である」ということを彼らに理解させた。

札幌バンドは、牧師には一円たりとも使わなかった。経済的に自立できる教会は、「言葉の完全な意味で独立であるところ、全国唯一の教会である。ただ財政的にのみならず、教会制度的に神学的に」であった。したがって、経済的な独立を尊重する彼らの考えは、独立の思想を立派に発展させる能力へと生かされた。内村は、「依頼は弱性にあらずして罪悪なりと。独立は美德にあらずして硬要的（インペラティブ）義務なり」と述べた。

レベラーズは、金銭的見返りを求めて説教する牧師を激しく批判した。彼らは、「学ぶこと……は、宗教を商売道具にしてしまう」と述べた。政治的デモなどのためにメンバーたちから寄付金を集めていたが、教会への寄付とは関係がなかった。

デイガーズは農業をするための寄付金を請うたのだが、それは一時的な手段だと考えていた。彼らは「牧師にお金を払う習慣に賛成する人は、この習慣を自明の事として行っており、これを神の命令だと見なしている。しかし、理性も聖書も正当とは認めていない」と考えていた。彼らは札幌バンドと百年ほど時代が離れ、海も隔

たっていたが、同じ聖書を与えられ、そして独立とリーダーへの報酬に関して類似した信念を持っていた。

この発表は、札幌バンドと非国教徒両者のキリスト教信仰の諸側面を形成するものとしての農業、質素な自立伝道者の理想と高学歴への志の矛盾、経済についてのバラレルな見方について論じた。札幌バンドと非国教徒におけるこれらの結びつきは、一見表面的なものでも彼らの深い繋がりの一部を示すものである。